吸血花

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
吸血花

【Ｎコード】
Ｎ３２６２Ｆ

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
江田島海上自衛隊幹部候補生学校で起こった奇怪な殺人事件。事件の解決を依頼された本郷忠はその途中奇怪な襲撃を受ける。後から遅れてやって来た役清明もまた。海軍の伝統の残るあの場所を舞台にした現代ファンタジーです。

第一章

吸血花

「総員起こし、五分前」

隊舎に放送が入る。ベッドの中にいる者が一斉に身構える。

ここは海上自衛隊幹部候補生学校。瀬戸内海に浮かぶ江田島にそれはある。

かっては海軍兵学校があった。その跡地につくられたものである。

かって世界にその名を知られた帝国海軍の息吹がここには残っている。ここにいる者達は皆その意志の継承者達なのである。

その生活はかっての海軍のそれをそのまま行なっている。五分前精神に五省、そして厳格な規律。訓練の内容も旧帝国海軍のものをそのまま行なうか、基にしている。

象徴となっているのが赤煉瓦と呼ばれる建物である。全てイギリスから直接輸送した煉瓦により作られたこの建物で海軍を支えた多くの軍人達が育った。今は海上自衛隊の指揮官の卵達を育てている。

その赤煉瓦から歩いて数分の距離に隊舎はある。指揮官としての教育を受けている自衛官達、自衛隊でいう『幹部候補生』達がここで寝起きしているのである。

中は六階建てで廊下はカーペットが敷かれている。部屋は二つの部屋がドアを挟んで結ばれておりそれぞれ四人ずついる。候補生それぞれに一つずつベッドと木製のロッカーが支給されている。ベッドには濃い紫の作業服と黒い帽子、そして黒靴下が掛けられている。海上自衛隊の指揮官、自衛隊でいう『幹部』の作業服の色は濃い紫である。下士官や兵士は青である。

部屋の外をジャージ姿の教官達が歩いている。ちらちらと部屋の中を見る。五分前になると動いてはいけない。それを監視しているのだ。

「総員起こし」

ラッパの音が放送される。かっての海軍の起床ラッパの音だ。
候補生達が一斉に飛び起きる。そして服を素早く着込み帽子を被り黒い革靴を履く。そして全てを身に着けた者から順に部屋の外へ駆け出していく。
階段を飛ぶように降りていく。そして隊舎の前にあるグラウンドに出た。
そこにもジャージ姿の教官達がいた。彼等は『分隊長』と呼ばれる。候補生達は三十人程を一つの単位としてグループごとに分けられている。そのグループを『分隊』という。分隊長はそれまとめて指導する者である。学校でいうと担任といったところか。ちなみに彼等を補佐する者として『分隊士』がいる。彼等もジャージ姿でグラウンドにいる。
候補生達が降り立った。そして各分隊ごとに並び何やら大声で叫びだす。よく聞くと命令する声だ。それは軍隊、とりわけ海軍でよく使われる号令である。『号令調整』という。部隊で部下達を指揮する時の為の練習である。
「号令調整止め」
また放送が入った。すると候補生達はそれを止めた。そして皆作業服の上着を脱ぎはじめた。男は下の白いシャツまで脱ぐ。女はシャツは着たままである。
上着とシャツを丁寧に畳み下に置く。そして体操を始めた。
ラジオ体操とは違う。かなり独特の動きだ。『海上自衛隊体操』というものである。
隊舎を見る。時々窓から何か落ちてくる。毛布や枕である。隊舎を出る際畳み方が悪かったりすると落とされるのである。
これは幹部候補生学校で『赤鬼・青鬼』と呼ばれる教官達が行なっている。彼等の役職は『幹事付』。候補生達の生活指導全般を監督及び指導する。
毛布や枕が落ちるのを候補生達は体操をしながら黙って見ている。ひょっとしたら自分のものかも、そう不安を抱く者もその中にはい

る。だが彼等は今動けない。今は体操をしなければならない。それが終わったら腕立て伏せ等の体力錬成、そして掃除。彼等の生活は朝から忙しい。

毛布や枕はまだ落ちてくる。それを見る候補生達。顔や態度には出さないが不安そうである。その落ちるものの中でいっぷう変わったものが落ちてきた。

「！？」

それは枕ではなかった。かなり大きかった。毛布か、いや違う。平べったくはなかった。それにそれは窓から落ちてきたのではなく隊舎の屋上から落ちてきたのである。

「何だ、あれは」

グラウンドは騒然となった。教官達が屋上から落ちてきたそれへ一斉に駆け寄る。そしてそれを見て皆顔を蒼ざめさせた。

「これは・・・・・・」

それは人間の屍だった。既にその両眼に生気は無い。肌も蒼白となっている。

その屍で奇妙な点は異様に軽いことだった。身体は干乾びミイラの様であった。まるで全身から血が吸い取られたように。

「？この匂いは・・・・・・」

鼻のいい教官の一人がふと辺りに漂う香りに気付いた。それはダリアに似た花の香りだった。

第二章

「という事件がこの学校で起きまして」
黒地の制服を着た中年の男が歩きながら傍らの白ジャケットに青ジーンズの男に話をしている。
黒く濃い髪に濃いしっかりとした眉。人懐っこそうだがしっかりとした顔立ちである。
身体つきもしっかりしている。背こそあまり高くはないが筋肉があり贅肉は少ない。姿勢も良く歩き方が堂々としている。
見れば腕に金の太い線が三本入っている。これは幹部を表わすらしい。太い線三本だと二佐になる。
「何かこの江田島にはあまり似つかわしくない話ですね。幽霊とかならともかく」
ジャケットの男は松林を見ながら話をした。よく手入れされている。
「おや、ここの事はご存知でしたか」
二佐は少し眉を上げて言った。眉を上げたぶんだけ嬉しそうである。
「ええまあ。そっちの方面じゃあ有名なところですからね」
右手にその隊舎が見える。坂道を下っていく。
「随分綺麗な隊舎ですね。赤くて」
隊舎を一目見て言った。
「ええそうでしょう。これからの海上自衛隊をしょって立つ人材が育てられる場所ですし。これ位の設備がなくては」
「成程ね。確かに住居環境も大事ですからね」
「そうです、よくわかっておられますな」
男はそれはちょっと褒め過ぎだろう、と思ったが口には出さなかった。少し恥ずかしかった。
「昔は今目の前に見える建物で寝起きしていたのです。夏は暑くて

大変でしたよ」
　二佐の顔が懐かしいものを見る目になる。色々と思い出があるらしい。
「一部屋に二十人程いまして。あまり暑いと屋上で寝たものです」
「それはまた凄いですね」
　確かにこの江田島は暑い。瀬戸内海にあるせいか気候が暑く感じられる。
「昔の話ですけどね。今のこの隊舎はクーラーも暖房もありますよ。ただ節約はしていますが」
「ははは、まあそうでしょうね」
　その言葉が妙におかしかった。ただし本当に節約して夜の十時以降はクーラーも暖房もスイッチを入れてはいけないらしい。
　坂道を降りる。左手に少し小高い丘みたいなものが見える。
「かっての海軍の時代にはあそこに登って故郷を偲んだそうです。今は携帯電話という便利なものがありますから登る者はおりませんがね」
「成程」
　かっての海軍の息吹がまだ残っている。そう感じた。
　右手にはグラウンドがある。実に広いグラウンドだ。
　先程二佐がかっての隊舎だと説明してくれた建物の横を進む。見れば学校の校舎にそっくりだ。
（なんか職員室の前みたいだな）
　ふとそう思った。
　その校舎に似た建物を過ぎ階段を登る。ふと左手に小さい建物が目に入った。
「あれは？」
「ああ、あれは武器庫です。中に銃等が保管されております」
「あそこがですか」
　特に驚かなかった。自衛隊の施設である。銃位置いていなくては話にもならないだろう。

階段を登り終え廊下に出た。見れば赤煉瓦の建物の前だった。
「これがあの・・・・・・」
本では読んだ事がある。海軍兵学校の教室として使われ今は幹部候補生達の教室として使われている建物、赤煉瓦である。
本来の名は生徒館といった。だが殆どの者がこの通称で呼ぶ。それ程親しまれている名なのだ。
「こちらです」
左手にある階段に案内される。コンクリートの階段を登っていく。
階段を登り終え左を曲がる。講堂が並んでいる。
「今は教務中でしてね。皆中で講義を受けておりますよ」
古い床である。しかし頑丈に出来ている。
ある部屋のドアの前に着く。二佐はそのドアにノックをした。
「入ります」
そう言って中に入る。男も案内される。
「こんにちは」
男は部屋に入ると頭を垂れて挨拶をした。部屋の中は質素ではあるが綺麗に清掃され床には絨毯が敷かれている。前に学校の校長が使うような机が置かれその後ろは大きな窓である。左に我が国の国旗が飾られ右にはトロフィー等様々なものが置かれている。
机のところには白髪の男性が立っていた。黒地に金の制服である。腕にはかなり太い金の帯がある。これは海将補のものである。彼も実際に見たのは初めてだった。
見ればその海将補の男性も頭を下げている。これには正直驚いた。将軍や提督といえば威張っているものだと思っていたからだ。
「ようこそいらっしゃいました」
海将補は言った。見れば端正な顔である。歳は五十程であろうか。しかしその顔には皺もあまりなくよく日焼けしている。そしてやはり背筋が伸びている。背も高く体格もいい。
「京都から来られたそうですな。遠路はるばると御苦労様です」
「いえ、仕事ですから。本郷忠(ほんごうただし)と申します。どうかよろしく」

「こちらこそ。この海上自衛隊幹部候補生学校の校長を務める山本と申します。よろしくお願いします」
「は、はい。こちらこそ」
あまりに低姿勢なので驚いた。自衛官は一般市民に対して腰が低いとは聞いていたがこれ程までとは思わなかった。
「ところで本郷さんお一人だけですかな」
山本校長は落ち着き、かつしっかりとした声で尋ねてきた。
「はい」
「もう一人来られると聞いたのですが」
「相方ですか。ちょっと仕事で遅れます」
本郷は簡潔に言った。
「おや、そうだったのですか。私はてっきりお二人が同時に来られると思ったのですが」
「すいません、こちらの連絡ミスでして」
「まあそれでは仕方無いですな。本郷さん、貴方がこの海上自衛隊幹部候補生学校に呼ばれた訳はお聞きしていますね」
「ええ。何でも奇妙な殺人事件が起こったとか」
本郷の顔が変わった。眼の光も鋭くなる。
「はい。これがその写真です」
校長は一枚の写真を取り出した。
「これは・・・・・・」
それは一人の若い男の亡骸だった。黒と金の制服を着ている。
だがその制服は彼にとって大き過ぎた。否、大き過ぎるようになってしまったと言った方が良いか。

第三章

全身の血が抜かれている。その身体はまるでミイラの様であり肌は木の皮の様になっている。眼には生気どころか水気も無く乾燥しきっている。見れば髪や唇にも水気は無い。

「課業中トイレに用を足しに行った帰りの僅かな間に襲われたようです」

「課業・・・ああ授業ですね」

「はい。自衛隊用語で申し訳ありませんが」

「いえ、いいです。それにしても・・・また凄い時にやられましたね」

本郷は言葉を続けた。

「それにしてもこの亡骸・・・・・・吸血鬼にでもやられたのですか」

「やはりそう思われましたか」

本郷の言葉に校長は頷いた。

「皆そう噂しているようです。ただ昼に吸血鬼が出るのかと言っていますが」

「昼でも出ますよ。それはスラブの方のやつだけです」

本郷は素っ気無く答えた。

「そうだったのですか！？」

後ろに控えていた二佐が驚きの声をあげた。

「学生隊長・・・・・・」

校長がそれをたしなめる。

「はい・・・。申し訳ありません」

「まあ知っていても仕方の無い事ですからね。私も職業柄知っているだけですから」

「怪奇事件専門の探偵として」

「・・・・・・はい」

校長がそう言った時彼の眼が再び光った。
「吸血鬼は世界中にいますからね。大体はスラブのやつみたいに死体が知性と魔力を持って甦った所謂『アンデット』ですが中には巨人とか首が飛ぶ奴とかいますね。我が国にもいますよ」
「・・・・・・飛頭蛮の事ですか」
「・・・・・・よくご存知ですね」
本郷は校長の言葉に思わず息を呑んだ。
「学生時代小泉八雲の小説を読みましたら出てきましたので。ろくろ首の首が飛ぶものと聞いておりますが」
「はい。元は中国にそういう種族がいたという伝説がありましてね。それが渡来して来たものではないかとも言われていますが。ただろくろ首が人を襲わないのに対しこいつは夜になると首が身体から離れ人の血を吸いに夜の空を飛び回ります」
「夜、ですか」
「はい。昼は普通の人間と変わりなく暮らしていますから。昼動けるといっても正体を表わすのは夜ですからおそらくこいつではないでしょうね」
「そうですか。それでは一体・・・・・・」
校長は表情を暗くした。
「おっと、暗くなるのはまだ早いですよ」
本郷は校長をあえて明るい声で励ました。
「それを解決する為に私を呼んだんでしょ。任せて下さい、必ずこの事件を解決して御覧に入れます」
その言葉に校長も学生隊長も顔を明るくした。
「それでは貴方にお任せしましょう。一刻も早い事件の解決を期待しております」
「はい」
本郷は笑顔で答えた。
まず本郷は学校内を見て回った。事件が起こった場所を一通り見回し手掛かりを得る為だ。

「しかし広い所ですね、ここは」
赤煉瓦の向こうにある芝生のグラウンドを歩きながら言った。
「それに景色もいいですね。緑が多い」
「ええそうでしょう、観光地にもなっておりますしね」
よく日に焼けた顔の男性が側についている。階級は二尉、歳は二十七程であろうか。妙に澄んだ瞳が印象的だ。
「掃除も徹底させておりますよ。海軍からの伝統ですしね」
見れば砂地も綺麗に手入れされている。よくはかれている。
「それは私達が監督しています。少しでも手を抜けば容赦しません」
にこりと微笑んで言った。その顔がまた妙に子供っぽい。
この二尉こそ幹事付である。彼は赤鬼、二人いる幹事付のうちの一人である。
「えっと・・・井上二尉でしたっけ」
「井上は相方です。私は伊藤といいます」
「あ、すいません。伊藤さん」
「はい」
伊藤二尉は新ためて本郷の話をうかがった。
「あそこにある花は何ですか？」
赤煉瓦の前に咲いている一輪の赤い花を指差して尋ねた。
「？あれですか？」
伊藤二尉はその花を見て目を見開いた。
（？どういう事だ？）
本郷はその反応を見て不思議に思った。まるで見た事も無い、といった顔だったからだ。
「ちょっと行ってみましょう」
伊藤二尉に誘われ花のすぐ側まで行く。ダリアによく似た派手な花だった。
「ダリア・・・・・・じゃないですね」
「それよりもこの花を見たのは初めてなんですが。こんなとこにあったかなあ」

「え！？」
首を傾げる伊藤二尉を見て本郷は思わず声を出した。
「いえ。この候補生学校に植える草花は購入する段階で皆決められているのですよ。雑草なら清掃の時に抜かれますし。小さい花ならともかくこれだけ目立つ花が抜かれない筈は無いですしね」
伊藤二尉が花を見下ろしながら言った。
「それにしても・・・綺麗ですが妙な感じの花ですね」
伊藤二尉は言葉を続けた。
「確かに。何か変に赤い花ですね」
本郷もそれに同意した。見れば絵の具、いや鮮血を塗ったかの様に不自然な色の赤であった。
「全部の花を知っているわけではないですがこんな色の花は・・・・・・。見た事が無いですね」
少し顔を顰めて言った。首を思いきり傾げている。それにしてもこの人はどうも花に詳しいようだ。

第四章

「成程、確かに変わった花ですね。ところでもう一つお聞きしたいのですが」
「はい、何でしょう」
「先程話が出た候補生学校で草花を決める方は一体どなたでしょうか？」
「それですか？それでしたら勝手事務官ですね。経理課におられますよ」
「経理課ですか。何処にありますか？」
「あの建物ですが」
ここへ来る時に本郷が学校の校舎みたいだと思った建物を指差した。
「少し解かり難い位置にありますからね。案内させて頂きます」
「あ、有り難うございます」
かくして本郷は伊藤二尉に案内され経理課へ入った。
「花？最近購入していないですけれどねえ」
少し細長い顔の色の白い若い男性が電話で話をしている。
「あちらです」
伊藤二尉が手で指し示したのはその色の白い男性だった。見れば薄い黄色の作業服を着ている。
「まあこっちで調べておきます。またお電話差し上げるので暫くお待ち下さい」
若い事務官はそう言って電話を切った。
「勝手事務官」
伊藤二尉が彼に声を掛けた。伊藤二尉の声を聞き彼はこちらに顔を向けた。
「あ、アルファじゃないですか。どうしたんですか？」
「アルファ？」

聞きなれない言葉に本郷が反応した。
「自衛隊用語です。アルファベットをそれぞれ独特の言い方で読むんです。Aだと
『アルファ』、Bだと『ブラボー』というふうに。同じ役職が複数あるとABCで表すんです。例えば幹事付は私がAになります」
「へえ、そうだったんですか、成程」
伊藤二尉の説明に本郷は納得し首を縦に振った。
「お疲れ様です。私に何か御用ですか？」
伊藤二尉が説明をしている間に勝手事務官がこちらに来ていた。
「うん、こちらの方が君に聞きたい事があるというので」
「本郷です。探偵をやっております」
「こんにちは。勝手といいます。探偵というとやっぱり・・・・・・・」
「うん、その通りだ」
伊藤二尉は暗い表情で本郷の代わりに答えた。
「そうですか。それではよろしくお願いします」
「いえ、こちらこそ」
伊藤二尉は自分の受け持ちの講義の時間がきたので帰っていった。
本郷と勝手事務官は応接間に入った。
「ご用件は何でしょう？」
「はい。実は先程面白い花を見つけまして」
その言葉に勝手事務官の眉がピクリ、と動いた。
「また花ですか」
「また？」
その言葉に本郷も反応した。
「ええ。さっきも一術校の方から電話があったんですよ。最近赤いダリアに似た花を見かけるが何時何処で購入したのかと」
「赤いダリアに似た花ですか」
本郷は表情を変えずに言った。
「それならさっき私も見ましたよ。赤煉瓦の前で」

「えっ、本当ですか？」
勝手事務官が驚いて声を出した。
「はい。宜しければ見に行きますか？」
「はい、是非とも」
二人は応接間を出て赤煉瓦の前に行った。そしてその赤い花のところへ来た。
「この花です」
花を見る。そして勝手事務官が首をかしげた。
「やっぱりこんな花注文した覚えは無いですねえ」
「やはり」
「はい。それにうちは景観を大事にしますから。赤煉瓦の前に一つだけ置くなんて事はしないんですよ」
「えっ、そうなんですか？」
「はい。花を植えるとしたら一つの場所に集めて植えます。一つだけ植えるなんて事はしません」
「そうですか。だとすれば雑草ですかね」
「多分そうでしょう。おそらく明日の朝には候補生の人達が清掃で抜いてくれますよ」
「だったら問題ありませんね」
「ええ。後は幹事付の方でやってくれます」
勝手事務官は安心した顔で言った。彼は早速伊藤二尉に電話をし伊藤二尉の方もそれを了承した。こうして赤い花の話は終わった。
かに思われた。
「あれ、赤い花なんて無いよなあ」
翌日の朝清掃に来た候補生の一人が言った。
「ああ。ダリアに似た花だろ？そんなの無えぞ」
別の候補生も言った。
「けど報告はどうするよ。無いなんて言ったら話がこんがらがるぜ」
「適当に言っておこうぜ。抜きましたって」
「そうするか。無いものは仕様が無いしな」

こうして例の赤い花は抜かれ捨てられた事になった。こうして赤い花の話は一先終わり本郷はその日は自衛官達への聞き込みに当たっていた。

第五章

その日の夜見回りが学校や隊舎内を回っていた。これを『巡検』という。自衛隊ではかっての軍と同じく当直及び副直の士官、そして海曹、士がいる。彼等が学校内を点検して回るのだ。

だがこの候補生学校ではもう一つ点検に回る人達がいる。幹事付だ。彼等は候補生の掃除や生活の点検をする為校内及び隊舎内を見て回る。この際週番という候補生達が持ち回りで当たっている当直の学生達が同行する。

前述の通り幹事付は二人いる。アルファこと伊藤二尉は別のコースを点検して回っている。時折隊舎からベッドを壊す音が聞こえてくる。

もう一人の幹事付井上二尉が教官室前を点検していた時だ。ふと一枚の赤い花びらに気付いた。

「何なんだ、これは」

その花びらを手に取り週番学生達に言った。背が高く眼鏡を架けている。日に焼けて一見怖そうだがよく見れば愛敬のある顔立ちである。

「教官室前の清掃ふ・・・・・・」

不備、といいそうになった。指摘を受けたなら最悪の場合掃除をやり直す事になる。

だが彼はふと気付いた。昼に伊藤二尉が話していた赤い花の事が脳裏によぎる。

（そういえば勝手事務官も頼んでいないと言っていたな）

この花びらが妙に気になった。それに赤煉瓦前にあった筈のその花の花びらがどうしてこんな所にあるのか不思議だった。

（とりあえずあの探偵さんに見せてみるか）

井上二尉はそう思った。そして不備と言おうとした事を取り消すと花びらをズボンのポケットにしまい点検を再開した。

その時本郷は隊舎二階に設けられた来客用の部屋にいた。この日調べた捜査の内容を整理検証していた。
「結局今のところ手懸かりは無しか」
聞き込みや写真を見ながら溜息混じりに言った。
「どうもこういうのは苦手だなあ。いつも役さんがやっている仕事だし」
本郷はどちらかというと行動派であり歩き回って捜査するタイプだ。それに対して役は頭で考えるタイプである。
「仕事が別に入ったから仕方無いけれど早く来て欲しいな。頭を使う仕事は嫌いなんだよなあ」
ブツブツと不平を言いながら操作内容をまとめている。証言も特にこれといってない。
「そもそもこの学校の人間全員にアリバイがある。化け物が候補生や教官に紛れ込んでいるというわけではなさそうだな」
持って来た一冊の本を取り出す。吸血鬼について書かれた本だ。
「だとしたらアンデッドではないか。それだけでかなり限られてくるな」
吸血鬼の多くは甦った死者が己が精気を得る為に生者の血を吸うものである。
「狐か。いや、我が国の狐にそこまで性質の悪い奴はいないな」
本郷は何回か狐や狸とも対決している。いつも人間を化かして喜んでいる不良狐や狸を誘き出して懲らしめている。
「それにあいつ等だったら人の血なんかより揚げの方がずっと好きだ。油揚げなんてそこいらに幾らでもある」
狐の可能性も消えた。
「鬼か」
本郷の顔色が変わった。
「だとすれば問題だ。江田島は山が多いから隠れる場所が多過ぎる」
ちらりと左手を見た。そこには古鷹山がある。
「あの山にしろ険しいしな。鬼が潜んでいても誰も解からない」

しかしここで眉を顰めた。
「だがこの血の吸い方はどう見ても鬼のやり方じゃないな」
鬼は普通人の血より肉を好む。血はあくまで酒と同じく嗜好品なのである。実際酒に混ぜて呑んでいたりする。
「余計解からなくなってきた。結局何なんだ」
そこへ井上二尉が入ってきた。
「あれ、どうしました？」
本郷は意外な来客に少し戸惑った。
「実は先程の巡検中にこれを拾いまして」
ズボンのポケットからさっきの花びらを取り出した。
「これは・・・・・・」
人目見て解かった。赤煉瓦の前に咲いていたあの花のものだ。
「教官室の前に落ちていました。掃除の不備かと思いましたが場所が離れ過ぎていましたのでおかしいと思いまして」
「確かに。普通あそこから教官室までこんな物は飛んで来ませんし」
「それに朝の清掃で既に除去したと学生の方から報告を受けています。伊藤二尉が点検に行きましたが確かに除去されていました」
「だったら何故」
本郷は首を傾げた。
「ちょっと気になりますね。赤煉瓦の前まで行っていいですか？」
「ええ、どうぞ」
彼の許しを得て赤煉瓦の前へ向かう。赤煉瓦は真っ暗闇であり人の気配は無い。
「こうして見るとかなり不気味な建物だな」
ポツリと呟いた。この学校は兵学校からの歴史もあり幽霊話も極めて多い。
懐中電灯を点ける。井上二尉から借りたものだ。
「この辺りだな」
懐中電灯で照らしてみる。あの赤い花は何処にも見当たらなかった。

「やっぱりな。じゃあどういう事だ」
ゴミ捨て場は隊舎の一階にある浴室のすぐ下にある。教官室からはかなり離れている。
「風が吹いてもあそこまで飛ぶとは考えられない。ましてや午前中のゴミはとっくに捨てられている」
考える。その時ふと芳しい香りがした。
「これは・・・・・・」
それは花の香りだった。きつい、何処か癖のある自己主張の強い花の香りだった。
「・・・・・・ダリアか？」
その花の香りはダリアのものに似ていた。だが違っていた。ダリアの香りはここまできつくはない。
「違うな。何の香りだ」
その時本郷の全身に寒気が走った。恐ろしい妖気を感じた。
「！！」
咄嗟に身構える。懐から短刀を抜いた。
「そこかっ！」
気配のした方へ短刀を投げる。そして背中から刀を抜いた。

第六章

だが気配は消え去っていた。既に何処かへ逃げ去ったらしい。
「素早い奴だ。もういなくなったか」
暫く様子を見ていたがやはり気配はしない。刀を収め立ち去った。
ちらりと右の方を見る。そこには短艇が置かれている松林があった。
「そういえば我が国には海から来る血吸いの化け物もいたな」
磯女や濡れ女といった妖怪達である。これ等の妖怪は陸に上がり人の血を吸い殺す。
海は黒く闇の中に沈んでいた。本郷はそこにえも言えぬ不気味さを感じていた。
翌朝早く本郷は置き海辺のところを歩き回っていた。怪しい場所は無いか捜査しているのだ。
「こうして見ると色々とありそうだな」
ヨットや訓練用の船まで置かれている。その置き場のどれもが怪しく見える。
「ここまで来ると疑心暗鬼だな」
そう言って苦笑した。海の表面は静かだがその奥は暗闇に包まれ見えないのだ。
「一回この辺りの海を潜って調べてみるか。冗談抜きに怪しいぞ」
そうこう考えているうちに六時になった。総員起こしを知らせるラッパが鳴った。
「もうそんな時間か。早いな」
短艇置き場を見回る。やたらとフジツボが目につく。
「舟虫までいる。これは何処にでもいるな」
カサコソと動き回る灰色の虫を見ながら呟いた。その時向こう側から何か大きな音が聞こえてきた。
「何だ？」

赤煉瓦の方だった。振り向くと紫の作業服の一団がこちらへ向けて全速力で駆けて来る。
「一体何の訓練だ？」
慌てて短艇庫の方へ走る。そして彼等の邪魔にならないようにする。
見れば候補生達である。皆必死の形相で短艇に飛びつきそれを降ろす。そして次々と飛び乗る。
短艇が次々と出て行く。そして漕ぎ去っていく。
「あ、何処にいらっしゃったんですか？」
学生隊長である。ジャージを着ている。
「いえ、海辺の方も調べていたんです」
本郷は正直に答えた。
「おやっ、海にも吸血鬼はいるんですか？」
「ええ、まあ。ところでこれは一体何の訓練です？」
あるブイからUターンして来る短艇を手で指しながら問う。
「あれですか？総短艇というものです」
学生隊長は誇らしげに答えた。
「総短艇ですか。話には聞いてましたが」
「おや、ご存知でしたか」
何故か妙に嬉しそうである。
「ええ。この候補生学校の名物とも言える訓練の一つだとか。以前何かの本で読んだ事があります」
「そうです。何時この訓練が行なわれるかは秘密であう。これで即応体制等を養うのです」
「そうなのですか」
そういえば教官室の一つが昨日夜遅くまで明るかったな、と本郷は思った。
そうこう話しているうちに訓練は終わった。優勝は2分隊だった。
「何かやけに嬉しそうな方がいますね」
「あの人でしょう？坂上一尉といいます。あの分隊の分隊長です。

こういった勝負事に異様に燃える人でしてね」
「成程、だからあんなに嬉しそうなのですか」
「ええ。そのかわり負けた時は物凄く機嫌が悪くなりますが」
「ははは、解かり易いですね」
そして本郷は隊舎に帰った。とりあえず海に潜る事を許可してもらおうと考えていた。
「俺自身で潜るか。自衛隊の人に迷惑かけちゃ悪いしな」
彼はダイバーの資格も持っている。実際に河童や水虎を潜って退治した事もある。
大講堂と呼ばれる古風な趣のある建物の前を横切る。入校式や卒業式等重要な行事が行なわれる場所だという。
「綺麗だけどやけにものものしい建物だな」
本郷は見上げながらそう思った。欧風を取り入れる事の多かった兵学校だがこの建物は赤煉瓦と並んでその傾向が強い。白くまるで宮殿の様である。
「これだけ大きいと掃除も大変だろうな。そういえばいつも大人数で掃除してるな」
その時前から誰かが全速力で駆けて来た。
「？俺にか？」
その通りだった。見れば当直士官の武藤一尉である。３分隊の分隊長らしい。
「どうしたんですか？一体」
そう言いながら何かあるな、と思った。また犠牲者が出たか。内心暗澹たるものになった。
「・・・・・・ちょっと来て下さい」
その必死に狼狽しそうになるのを抑えた様子から大体察しはついた。彼について行く。
隊舎の二階だった。そこに犠牲者はいた。
「やはり・・・・・・・・・」
その屍を見て自分の予想が当たった事を嫌に思った。物言わぬ屍

は虚空を見上げたまま何も語らない。

第七章

またもや起こった事件に候補生学校は騒然となった。話される事はそればかりであり皆姿を見せぬその殺人鬼の影に怯えていた。
「まずい事になったな」
こういった状況は容易にパニックに繋がる。そうすれば魔女狩りかそれに似た状況になる。そうすれば除け者にされる者も出て来る。それこそ吸血鬼の狙いなのである。
「捜査を急ぐか。このままでは恐慌状態になる」
学校長に海中の捜査を求めた。これは思っていたよりもあっさりと認められた。
「意外ですか」
学校長は快諾され拍子抜けする本郷に対して笑いながら言った。
「ええ、まあ」
とかくお役所は何だかんだと言ってこうした面倒な事を好まない。だからこそ本郷も何としても認めさせるつもりだったのだ。
「全ては事件の迅速な解決の為です。大いにやって下さい」
「それにしてもスーツやボンベまで貸して頂けるとは・・・・・・」
あまりの太っ腹に流石に少し悪い気がした。
「なあに、こういった事は徹底的やりませんとな。中途半端が一番良くない」
どうも思ったよりざっくばらんでさばけた人である。
「そうですか。それでは早速取り掛からせて頂きます」
本郷はにこりと笑って言った。
「ええ。ただし水中銃もお忘れなく」
「水中銃？ああ、そうでしたね」
江田島が浮かぶ瀬戸内海はわりかし鮫が多い。何年かに一度鮫の被害もある。
「どうぞ」

ある教官からスーツとアクアラング、そして水中銃を手渡される。
見れば顎がやけにしゃくれた人物である。一分隊の分隊長らしい。福本三佐という人である。
「気を付けて下さい。あの下は色々と岩が入り組んでいますから」
真摯な表情で忠告される。
「解かりました」
それを聞いて本郷の顔も曇る。そういうところにこそ妖怪は潜んでいるのだ。
福本三佐はこれから講義らしく一緒には行けなかった。代わりに別の教官が来た。国母二尉という人だ。かなりの巨漢である。
「くれぐれもお気を付けて、何かあったらすぐに行きますから」
国母二尉もスーツを身に着けている。
「その時は・・・・・出来る限り来ないようにします」
アクアラングを口にし飛び込んだ。中は緑の世界だった。
視界は悪い。水中眼鏡を着けているとはいえ殆ど見えない。
(これは思ったより厄介だな)
目の前を魚が横切る。結構大きな魚だ。
海底に辿り着く。福本三佐の言葉通り岩が入り組み穴が多い。
(むっ)
穴の一つから何かが出て来た。それは蛸だった。
(蛸か。そういえばここは牡蠣の名産地だったな)
思えば折角江田島に来たのに海の幸を全然食べていない。朝から昼まで歩き詰めで捜査ばかりしている。
(まあそれが仕事なんだけれど。終わったら食べに行くか)
泳ぎ去っていく蛸を見ながらそう考えていた。海の幸は嫌いではない。
小さい穴は用心して通り過ぎて行く。隠れているとすれば大きな穴だ。小さな穴はかえって危険だ。蛸なら墨を吹くだけだがもしウツボなら冗談では済まされない。
(見ればガンガゼまでいる。下手に触ったら吸血鬼どころじゃない

ぞ）
　手の動きに敏感に反応する海栗を見て思った。それにしても大きな穴が見つからない。
（おかしいな。怪しい場所は一つも無いぞ）
　本郷はいぶかしんだ。海ではなかったのか。
（一番怪しい場所だったが。だとすると陸しかないな）
　そう考えていた時だった。頭上を何かが襲った。
『何っ！？』
　それは緑の槍だった。二三本空から海中へ突き刺さった。
『上かぁっ！』
　急いで上へ急ぐ。どうやら第二撃はまだらしい。
　海上へ顔を出す。そして咄嗟に周りを見る。
「何処だっ！」
　だが緑の槍の主は何処にもいなかった。周りには小船も無く海面も静かだった。
「いないか・・・・・・」
　気配もしなかった。何処から攻撃したのかさえ解からなかった。
「本郷さ～～ん、どうしましたあ～～～っ？」
　見れば短艇置き場はかなり遠くになっていた。呼び掛ける国母二尉の巨体がまるで豆粒の様である。
「あ、何でも無いです」
　大声で言葉を返す。結局この捜査では何も手懸かりは得られなかった。
「海にはいないか、結局」
　スーツやアクアラングを返し本郷はヨット置き場から海を眺めていた。
「しかしさっきの緑の槍・・・・・・。明らかに俺を狙っていた」
　それが誰の手によるものか、解からぬ筈がない。
「やっぱりいるな、化け物が」
　ふと赤煉瓦を見る。日に照らされその赤さが一際際立っている。

「俺に喧嘩を売ってくれるとはな。じゃあ買ってやるよ、高くな」

風が吹いた。静かだった海面が波立つ。

第八章

その頃江田島に一隻のフェリーが呉から来た。この島には当然の様に電車は走っていない。車で来れないこともないがかなりの遠回りとなる。従って最もよく使われる交通手段は船である。

フェリーは呉からのものと広島からのものの二つがある。広島から呉に行くのに結構時間がかかるが広島からでも時間は大して変わらない。ただ船は呉からのものの方が大きくゆったりと出来る。

そのフェリーから一人の男が下船した。茶色の髪を中央で分けた細面の男である。細い一重の眼をした色の白い中々の美男子である。紺色のスーツに青いネクタイと白のカッター、そしてその上からクリーム色のコートを着ている。

背は結構ある。本郷よりも少し大きい程か。だが全体的に細い為大柄という印象は受けない。

「遅れてしまったな」

その男はフェリーの桟橋を出て一言言った。

「本郷君はどうしているかな。また可愛い女の子に声を掛けていなければいいが」

どうも本郷の事を良く知っているらしい。

「さて、と行くか。あの道をまっすぐに行けばいいな」

目の前に車道は広いが歩道の狭い登り道が見える。

ふとタクシーやバスが目に入る。だがそれには乗ろうとしない。

男はそのまま歩いていく。そして登り道の歩道を歩いて行く。

「そうですか、海の中には何もおかしな所は無かったですか」

学校長が校長室で本郷の報告を受けていた。

「はい。どうやら海から来た奴ではないようです」

本郷は言った。捜査中に攻撃を仕掛けられた事は黙っている。

「だとすればやはり中にいるのですか。だとすれば何処に」

校長は腕を組んで考えた。

「何日かこの学校を捜査させて頂きましたが色々と隠れようと思えば隠れる事の出来る場所が多いですね。ひょっとしたら思わぬ場所に潜んでいるのかも」
「思わぬ場所・・・・・・」
その言葉に校長は更に思案を巡らせた。
「何しろ広い学校ですからな。思い当たる場所は多くあります。とにかく隠れていそうな場所は私が考える限りでもかなりありますよ」
「ですね。今その場所に一つずつ結界を置いていっているのですがこれにも一つ問題があります」
「何ですか？」
「若し吸血鬼が一つの場所に隠れておらず常にこの学校内を移動しているとしたら」
その言葉を聞いてさしもの学校長にも悪寒が走った。まさかこのすぐ側にも吸血鬼は蠢いているのかも、そう考えるだけで言いえぬ恐怖に囚われた。
「しかも相手は昼にも行動を起こしています。これは注意して考えるべきです」
多くの人は吸血鬼は夜行性だと考えている。ここに盲点があるのだ。
「しかも襲われているのは一人でいる者ばかり」
「はい。複数でいる場合は事件は起こっていません。これからは校内にいる人は極力一人での行動は控えるべきです」
「・・・わかりました。すぐに通達しておきましょう」
「これだけで犠牲者がかなり減る筈です。ここは自衛隊なので団体行動が基本ですがそれをより徹底させて下さい」
「はい」
校長は頷いた。本郷は正直将補の様な地位のある年配の人にこうして命令の様に言うのは気が引けたが悠長な事を言っている場合ではないと考えたからだ。
「後は対策ですが・・・・・・」

ここで本郷は表情を暗くした。
「申し訳ありませんが相手が一体どの様な種のものかまだ把握出来ていません。ですが海からのものでもアンデッドでもないのは確かです。そして確実にこの校内にいます。絶対にこの手で倒してみせます」
「それはお願いします。我々は海と空から来る人に対しては対処出来ますが人でない異形の者は難しいので。頼みますよ」
「はい」
ここに来た時と似たようなやり取りで校長との話は終わった。

第九章

本郷は赤煉瓦を歩いていた。今は昼休みで中に生徒はいない。
だが隊舎内は別である。昼の間も彼等は忙しく動き回っている。
教官室の前にも多くの生徒がいる。皆皮の黒い鞄を手にせわしなく動いている。
「俺より忙しそうだな」
映写講堂と呼ばれる講堂の横を通る。民間から講師等を招いたりした場合はここで講義を行なうらしい。
「何かどっかの団体の館長も呼ばれた事があるらしいな」
顔を講堂に向けながら呟いた。
「あそこを贔屓にしている野球選手は嫌いだがな。態度が酷過ぎる」
そう思いながら視線を下げる。その時ある花に気が付いた。
「この花は・・・・・・・・・」
間違い無い。赤煉瓦の前にあったあの花だ。この血の様な赤は忘れようとしても忘れられない。
「こんな場所には無かった筈だが」
本郷の心の中に凄まじい疑念が生じた。
「一体どういう事だ、花が動くわけがない」
今までの事が彼の脳裏で目まぐるしく動いた。そしてある結論に達しようとした。
「結論を下すにはまだ早いか」
本郷はそこで思考を止めた。
「どちらにしろすぐにわかることだ」
本郷は隊舎に戻った。そしてその刃を白く光らせた。
隊舎に戻ると何やら妙な事が起きている。入口にニンニクの束が飾られているのだ。
「これは？」
見れば十字架まである。何がしたいのか一目瞭然だった。

「まあ一応気休めにですが。こうしておけば学生達もいささか安堵するでしょうし」
伊藤二尉が言った。どうやらこの人が全て手配したらしい。
「しかしお言葉ですがこれは吸血鬼のほんの一部にした効きませんよ。スラブの方のものにしか」
「それはよく解かっております。しかし」
伊藤二尉は顔を暗くすると共に締めた。
「このままでは学生達がパニックに陥りかねません。それを防ぐには例え気休めでもしておかないと」
「そうですか」
その気持ちは痛い程よくわかる。確かにこのままでは皆恐怖に耐え切れなくなるだろう。
「けれど御安心下さい。吸血鬼の正体はもうすぐ掴んでみせます。それまでの辛抱です」
「はい」
本郷は部屋に戻った。そしてそこで刀や短刀の手入れをはじめた。
(早ければ今日にでも出て来るな)
刃をかざす。白銀の光がその場を照らす。
(その時に決めてやる。必ずな)
やがて日が暮れた。夜の帳が学校を支配する時になった。
消灯の時間になった。本郷は部屋にいなかった。
「ここなら全部見えるな」
隊舎の屋上にいた。その場所から学校全体を見下ろしている。
「さて、何が出るか。鬼や狐みたいな生半可な奴でない事だけは確かだな」
教官室の方を見る。流石にもう誰もいないらしく灯りは灯っていない。
左手には夏期に使われる講堂がある。そこにも灯りは点いていない。
「隊舎の中は来れまい。あれだけの結界を張るのには苦労したがな」

ニヤリ、と笑う。どうやら相当の自信がある様だ。
夏期講堂から目を離し教官室の方を見る。廊下を見渡した後映写講堂を見る。
「あの花は見えるかな」
ふとあの赤い花の事を思い出す。そして目をやる。
見れば相も変わらず赤い花を咲かせている。夜だというのにその中に赤い光を発するように咲いている。
「あそこまでいくとかえって不気味だな」
そう思いながら見ていた。ふとその花が妖しく動いた。
「むっ！？」
花が急に大きくなる。花びらが人の形を取りはじめる。
「どういう事だ・・・・・・」
植物の妖怪とも何回か闘った事がある。『ほうこう』という木の精の一種や呪木っ子という妖怪等である。
「人に変化する物の怪か・・・・・・」
見た所西洋の妖精に近いのかも知れない。緑の長い髪を持つ全裸の若い女に変化した。
「緑の髪・・・・・・」
それには心当たりがあった。海中を捜索していた時頭上から彼を襲ったあの緑の槍だ。
「あいつか。間違い無い」
本郷は屋上から降りた。そして隊舎を出た。
女怪は教官室の上の階の廊下を進んでいた。本郷の事には気付いていないようだ。
映写講堂の方を遠回りに回りその廊下へ向かう。彼が着いた時女怪はそこにはいなかった。
「何処だ」
辺りを警戒しつつ前へ進む。既に刀を抜いている。
廊下の中央に出た。上下へ進む階段がある。
「どちらだ」

強い花の香りがした。赤煉瓦の前で嗅いだあの香りだ。それは上の方からした。
「上か」
階段を登る。三階に出た。
香りは更に上にまで続いている。それは屋上にまで続いていた。
「屋上か」
学生隊長の言葉を思い出した。暑い時にはよく屋上で寝たものだと。
屋上へ上がった。そこにはあの女怪がいた。
こちらに背を向け前へ進んでいる。だが本郷の気配に気付きこちらを振り向いた。
白い肌に赤い血の様な眼をしている。人の血を吸う魔物には紅い眼を持つものが多い。
「やっと会えたな。思えば遠回りしたものだ」
あの花が正体だったとは。今思えば妙な事が多過ぎた。
「もっともそちらは早いうちからこちらの事には気付いていた様だがな」
左手で刀を構える。右手には短刀を持つ。
「海でのあの緑の槍、御前の仕業だな」
それに対し女怪は笑みで答えた。魅惑的でありかつ残忍さをたたえた笑みだ。
「そうだとしたら?」
高く澄んだ美しい声である。しかし何処か血の混ざった感じがある。
それは肯定であった。それが証拠に右腕を本郷に向けてきた。
「だったら話は速い。宣戦布告はとっくの昔に行なわれているんだしな」
本郷はその目を光らせた。
「どういたしまして。そしてそれは受け取るの?どうするの?」
その右手を顔に近付けた。見れば緑の爪をしている。

「決まっている。買ってやるさ。代金は貴様の命、釣りはいらないぜ」
短刀を投げた。一直線に女怪へ向かって飛んでいく。
刀身には盆字が書かれている。経典にも使われ法力が込められている。
一本だけではない。本郷は短刀を次々に投げた。一直線に、流星の様に女怪へ向かって飛んでいく。
しかし女怪は怯まない。その数本の短刀を表情を変えず見ている。
「その程度か」
笑った。不敵な笑みだった。
右手を横に一閃させた。すると短刀が全て地に落ち音を立てて転がった。
「何！？」
見れば女怪の指が変形していた。その緑の爪が蔦になっていたのだ。
その蔦の色には見覚えがあった。海で捜査をしている時上から襲い掛かってきた槍だ。

第十章

「成程、それが貴様の武器か」
縮み元の爪に戻っていくその蔦を見ながら言った。
「その通り。けれどこの蔦はこれだけじゃないのよ」
「ほお、まだ使い道があるのか。便利な蔦だな」
「どういたしまして。それはそうと何に使うか知りたいでしょ？」
「勿論」
本郷は懐から新しい短刀を取り出しながら言った。まだストックはある。
「こう使うのよ」
そう言うと右手を前に伸ばした。爪が再び蔦に変化した。
その蔦が本郷の喉下に襲い掛かる。本郷はそれを刀で咄嗟に打ち払った。
「首を・・・・・・そうか」
その攻撃で本郷はこの蔦が何の為に使われるのか悟った。
「その通りよ。私はここから血を吸うのよ」
女怪はニイィ、と笑った。その唇が血の様にぬめった。
「勿論口から吸う事も出来るけれどね。けどね、指から吸うのが一番美味しいの」
「だろうな。植物は根から養分を吸うからな」
本郷は場所を移動した。出来る限り攻撃し易い場所を探している。
「そうよ。これでここの子達の血を頂いたの。とても美味しかったわ」
蔦を爪に直しながら言った。
「成程ね、じゃあ今までさぞかしたっぷりと頂いたことだろう」
「いえ、まだよ。まだ満腹にはなっていないわ。私のこの美しい身体をより美しくする為にはもっと血が必要よ」
「ふん、何処ぞの伯爵夫人みたいな事を言いやがる。結局人も化け

物も血に狂った奴は考える事が同じってことか」
　かってハンガリーにはエリザベート＝バートリーという女がいた。彼女は自分の美しさを保つ為多くの若い娘を鉄の処女と呼ばれる機械で惨殺し、その搾り取った血で風呂に入り恍惚としていたという。今でも欧州の暗黒の歴史にその名を残す呪われた魔性の女である。
「今度は貴方の血を頂いてあげるわ」
　そう言うと腕を本郷に向けてきた。爪が蔦に変わり襲い掛かる。
「生憎俺の血は吸わせるわけにはいかなくてね」
　跳躍でそれをかわす。そして着地してすぐに構えを取った。
「もっともこれ以上他の誰の血も吸わせるつもりは無いが。諦めて魔界にでも帰ったらどうだ」
「折角だけれどお断りするわ。だってまだまだ満腹になっていないんですもの」
　そして再び蔦を伸ばす。本郷はそれを冷静に見ていた。
「見切った！」
　蔦が本郷の身体をすり抜けた。そして逆に短刀が女怪を襲う。
「うっ！？」
　女怪はそれをぎりぎりのところでかわした。蔦を慌てて引き戻す。
「どういう事！？身体をすり抜けるなんて」
「ふん、見切りというものを知らないらしいな」
　本郷は自信に満ちた顔で笑った。
　見切りとは武道の極意の一つである。相手の攻撃の動きや早さを完全に掴みそれを至近で最少の動きでかわすのである。武道の達人のみが為し得る技である。
「見切り・・・・・・。よくは解からないけれど要するに私の攻撃を読んでいるということね」
「まあそういう事だ。もう貴様の蔦は通用しないぞ」
「それはどうかしら」
　それに対して女怪は笑った。
「強がりか。プライドの高い吸血鬼らしいな」

「強がり？違うわね」
女怪は言い返した。
「知っているのよ。貴方の確実な死を」
「それは七十年後か、八十年後の話か？少なくとも今の話じゃないな」
「いえ、今よ」
女怪の腕が上がった。すると床から棘が出て来た。
「ムッ！？」
それは地走りの要領で本郷に向かって来る。本郷はそれを横に見切ってかわした。
「甘いわね」
そこへ蔦が来た。本郷の右肩をかすった。
「失敗したわね。その首に突き立てて吸ってやろうと思ったのに」
「お生憎様・・・・・・」
軽口を叩くがその顔は笑っていない。頬を冷や汗が伝う。
「けれど今度は外さないわ。覚悟するのね」
女怪は笑った。勝利を確信した笑みだった。
「それはどうも」
表面上は軽口を叩く。だが内心はまだ冷や汗が流れている。
(まずいな、これは)
一つだけなら何無くかわせる。だが複合攻撃となると厄介だ。
(見切りは駄目だな。跳ぶしかないか)
棘が来た。それが地走りしてこちらに来る。
「はっ！」
本郷は跳んだ。こうするしかなかった。
「やはり！」
女怪の爪が伸びた。だが本郷はそれを刀で打ち払った。
「何の！」
だげそれで終わりではなかった。もう一撃来た。
「なっ！」

それは左腕だった。刀には右の蔦を打ち払った衝撃がまだ残っている。こちらに戻すにはまだ間がある。
「かかったわね」
それを見て女怪は笑った。蔦はそのまま一直線に本郷の首筋へ向けて伸びていく。
（終わりか・・・・・・！）
さしもの本郷も観念した。その時だった。
何かが左の蔦を撃った。その衝撃により蔦は大きく弾き飛ばされた。
「誰っ！？」
咄嗟に辺りを見回す。危機を脱した本郷は両足を屈めて着地した。
「だらしがないな、本郷君」
本郷から見て右手、女怪から見て左手から声がした。二人はそちらへ顔を向けた。
「遅いですよ、全く」
本郷がその声の主に対し微笑みながら言った。
「申し訳ない、手こずったものでね」
声の主もそれに対し微笑みをもって返した。コートを着た男がそこにいた。手には拳銃を持っている。昼にフェリーで江田島に来たあの男だ。月の黄金色の柔らかな光を背に立っている。
この男の名は役　清明（えんのきよあき）という。本郷と一緒に京都で探偵を営んでいる。言わば彼の相棒である。
「吸血鬼と聞いていたが意外だな。アンデッドではなく植物の変化とは」
役は銃を構えながらその女怪と対峙した。
「だがそうだからといって対応が変わるわけじゃない。遠慮なくこの銀の銃弾を受けてもらうぞ」
照準を女怪の胸に合わせる。
「あら、私が植物の変化ですって？」
役の言葉に対し皮肉混じりに言った。

「他にどう見ろというんだよ、花から変化してるっていうのに」
本郷が言い返した。
「所詮その程度の知識しか無いの。とんだヘボ探偵ね」
「生憎今まで失敗した仕事は無いけれどな」
本郷は更に言い返した。
「それは今までの相手が大した事なかったからでしょうね。今の仕事で失敗してあの世に旅立つことになるわ」
「それはどうも」
女怪の言葉に今度は役が返した。
「しかしその蔦でどうして植物の魔物でないと言えるのだ？」
役が照準をその頭部に当て直しながら問うた。
「それはあの赤煉瓦を見る事ね」
「赤煉瓦？」
その言葉に二人は眉を上げた。
「そう、あの赤煉瓦をよく調べてみることね。そうすれば私が何なのか解かるかも知れないわよ」
女怪はそう言うと左手を肩の高さで掲げた。
「今日のところはこれでさようなら。次に会う時までその血と命、預けておくわ」
「むっ、待て！」
二人が叫び攻撃を仕掛ける。だがそれより前に女怪の身体を赤い無数の花びらが包んだ。
花びらは吹雪となり彼女の身体を包んだ。そして彼女はその中に姿を消した。
「消えたか」
花びらが全て地に落ちた時女怪の姿は無かった。その花もまるで幻影の様に消えていった。
「今日のところは仕留め損ないましたね。次に会った時にしますか」
「ああ。しかし気になる事を言っていたな」
役は考える顔をした。

「ええ、赤煉瓦がどうとか」
本郷も眉を顰めた。
「どういう事だ。あの建物に何か秘密があるとでもいうのか」
二人はふと左手を見た。そこには闇夜の中月の光に照らし出される古い欧風の建物があった。

第十一章

屋上での闘いの後本郷と役は捜査を続けると共に赤煉瓦について調べた。それは主に図書室に置かれている資料や兵学校の歴史に詳しい広報官の人に聞く等して行なわれた。

「こうして調べてみるとつくづく歴史のある建物ですね」

「ああ。ここであの帝国海軍の提督達もその青春時代を過ごしていたしね」

二人は中庭を歩き回りながら話していた。

「あと上下関係がかなり厳しかったようですね」

それは有名だよ。一号生徒と四号生徒じゃ石ころと神様程地位が違っていたというし」

役が中庭に転がっている一つの小さな石を見ながら言った。

「それはちょっとオーバーでしょう」

「オーバーじゃないよ。昔はそんなものさ。あの武専もそうだったし」

武専、その正式名称は武道専門学校という。日本全国から柔剣道、そして薙刀の達人を選りすぐって集めた学校であり少数精鋭を旨とした武芸者の養成機関とも言える学校であった。その門は帝国大学など比べ物にならずこの学校に落ちた者の受け皿としてあの国士舘大学が設立された程である。今だにその名が伝えられている伝説的な学校である。

「武専ですか。あそこはまた極端な例でしょう」

「それより極端な例がここだよ。本郷君、それにしてもその事を知らなかったのかい？」

役がそう言って本郷の顔を見た。少し意外そうな顔である。

「いえ、知っていましたよ。ただあの武専より凄いとは」

彼は剣術を学んでいる為武専の事にも詳しい。なお他の武道の事にも詳しいのである。

「有名なのが鉄拳制裁かな。歯を食いしばれっ、というあれ」
「あっ、それは映画でも見ました」
「兵学校といえばその鉄拳制裁。入学したらいきなり始まったらしいからね」
「何か体育会系ですね」
「そう、体育会系の基の一つだったからね、ここは。その他にも色々と厳しかったんだよ」
「それは本で読んだ事があります。『赤煉瓦の監獄』って呼ばれていたんでしょう」
「何だ、詳しいじゃないか」
役は少し呆れた顔で言った。
「ある程度は知っているつもりでしたけれどね。ただそこまで物凄いとは」
「けれどあまり辞める人はいなかったらしいよ」
「何でですか？」
「意地があるからね。折角入ったっていう。何せ東京帝国大学に入るより難しかったそうだから」
「そうらしいですね。じゃあ武専とどっこいどっこいというところですか？」
「だから何でいつも武専を出すのかな。まあ確かに難関だったけれどね」
役はそこまで言うとふと顔を暗くした。
「確かに辞める人は少なかったけれどね」
「・・・・・・何かありそうですね」
本郷は彼のその顔から何かを察した。
「うん。自殺者は結構いたらしい」
「自殺者、ですか」
かっての軍は組織に人を合わせるという方針であった。これはどの組織でも大なり小なりそうであり責められる謂れは無い。組織とはそういった一面を持つ事は事実である。だから組織によっては合

わない人もいる。ただ軍隊というものはそれが他の組織よりも強いのである。
　だからこそ合わない人物も多い。体育会系のノリについていけない人や厳格な規律に馴染めない人、暴力に耐えられない人。特に暴力に耐えられない人にとってはつらいものであろう。今だに暴力教師などという社会にとって悪性腫瘍でしかない輩が多々いる嘆かわしい現状であるがこの時代こうした暴力は常識であった。暴力教師とは似て非なるものではない。彼等はこの時代の常識に従って拳を振るっていたのであって暴力教師の様に自らの感情や嗜虐性を抑えられずに無意味な暴力に走る輩共とは根本から異なるのである。
　だがその暴力に耐えられない人というものは何処にでもいる。何時の時代にでも。こうした人達にとってそれは耐え難い苦しみであり何時それが振るわれるか怯える日々が続く。
　これに耐えられるうちはいい。だが耐えられなくなった場合事態は悲劇となりかねない。
「・・・・・・まあ何時の時代にでもある事ですけれどね」
「ああ。悲しい事にね」
　役は目を閉じ静かに頷きながら言った。
「そうした歴史もここにはあるんですね」
「そういう事になるね。この建物は伝統と共にそうした陰の歴史も併せ持っているんだ」
　役はその言葉で説明を締めくくった。
「ただここまで聞いて一つ気になる事があるんですけれど」
「何だい？」
「あの吸血鬼は女ですよね。ここはつい最近まで男ばかりのところだったんじゃないですか」
「そう、問題はそこだ」
　役が指をビシッと振りながら言った。指が一振りしたところで止まる。
「出て来るのが死霊だったら話は解かるんだ。実際この学校はそう

いった話が多いようだしね」
「軍の施設には付き物ですね」
「まあね。特にここは世界有数の心霊スポットでもあるし」
あまり知られていないが事実である。
「しかし女の霊、ですか？何か違うと思いますけれど」
「そうなんだ。私も考えているんだが妙に引っ掛かる」
役は首を傾げた。
「大体蔦や棘、花びらを使うところを見ると花の怪だが違うようなことを言っているし。赤煉瓦というのなら死霊か何かだろうがやはりそれでもなさそうだ」
「この学校に詳しい人に聞いてみますか？」
「そうだな、それがいい」
こうしてこの学校の事に詳しい人物に話を聞く事になった。教官の一人斉藤准尉という人である。

第十二章

髪に白いものが混じったやや小柄な人である。一見頑固で怖そうであるが話してみると温厚で気配りの出来た人である。
「女の霊、ですか」
教官室で幅の広い椅子にすわりさえ佐伯准尉は二人と話をしていた。それを聞いて彼は口に右手を当てた。
「ご存知ですか？」
本郷は思わず身を乗り出した。
「ええ。一応は」
准尉は口から手を離し答えた。
「ですが赤煉瓦とは関係ありませんよ」
「えっ！？」
その言葉に二人はいささか拍子抜けした。ちなみに女怪の事は校長以外には話していない。
聞くところによると戦前兵学校の時代に学校で訓練を受けている夫に赤子を見せる為に入った女性が撃たれたという。その場所は赤煉瓦の前のグラウンドだという。
「あそこだったんですか」
本郷はあの緑のグラウンドを脳裏に映し出した。伊藤二尉に案内してもらった場所だ。
「はい。夜になると女の声が聞こえるとか」
「そうですか。哀しい話ですね」
「ええ、まあ」
佐伯准尉はそう言うと顔を暗くした。どうもあまり話したくはなかった話らしい。
その話の後二人はそのグラウンドに出た。
「どうです？何か気配はありますか？」
本郷が尋ねる。こうした事は役の方が得意だ。法力は彼の方が断

然凄い。
「ううん・・・・・・」
役は顔を顰めた。
「霊力は感じるが少し違うな。あの女怪のものとはまるで異なる」
「そうですか。やはり」
「君も感じるだろう？この場で感じられる気は人のものだ。あの女怪のものは明らかに魔物のものだ。しかも強さが違う。あの者からは強烈な妖気と憎悪が感じられた」
「ですね。それは俺にもわかりました」
本郷が頷いた。
「あともう一つ気になるんだが」
そう言って顔を海の方へ向けた。
「君が攻撃を受けたのはあそこだったよな」
短艇庫の方へ指を向けた。
「ええ」
「気になるな。見ておこう」
二人は短艇庫の方へ向かった。
「丁度あの辺りでしたね」
短艇置き場のところから先日本郷が襲われたあたりを指差す。
「そうか、あの場所か」
役もその場所を確認した。目の光が強くなる。
「何か感じますか？」
「・・・・・・いや。海の方にもこちらにも妖しい気配は一切感じられない」
役は首を振った。そこで視線を移した。
「そういうわけでもないな。この砲台から妙な気を感じる」
左手にある巨大な戦艦らしきものの砲台を見る。
「これですか、確か陸奥の砲台ですよね」
「うん。第二次大戦の時に爆発事故で沈没した艦だったね」
陸奥はワシントン軍縮会議開催中に竣工した艦であり第二次世界

大戦中も南洋に展開していた。この艦はある事件で有名である。
昭和十八年六月八日、第三砲塔付近から突如として白煙を吹き上げた。そして火薬庫の爆発が生じ船は真っ二つになり沈没したこの際多くの船員が船と運命を共にしている。その数千百二十一名であった。その沈没の原因は放火とされるが今ひとつよく解からない。不明な点も多い事件であった。
その後靖国神社や高野山にレリーフや碑文が贈られた。船と共に海に沈んだ英霊達は今静かに眠っている。
この砲塔はその主砲塔である。爆沈後に引き揚げられたものではなく軍縮条約の時に取り外されたものである。
「何か妙だな。ごく普通の砲塔なのに」
「まあああいう事故のあった艦の砲塔ですけれどね」
二人がそういった話をしていた時だった。不意に後ろから声がしてきた。
何しとるんですか？」
中年の髪の黒い男性である。顔は見た事がある。大熊三佐という。この人も教官の一人だ。
「いえ、ちょっとこの砲台が気になりまして」
役が答えた。
「おお、流石ですな。やはり気付かれましたか」
大熊三佐は笑って言った。
「えっ！？」
その様子に二人は目を点にした。それを見ても笑っている。どうやらその様子が楽しいらしい。どうも少し人が悪いところがあるらしい。
「実はこの砲台には面白い話がありまして。夜の十二時になると旋回するらしいのですわ」「本当ですか！？」
その話に二人は驚いた。

第十三章

「まあ噂ですけれどね。それを見ようと夜まで自習室で頑張った一術校の者もおります」
一術校とは第一術科学校、幹部候補生学校とは別にある自衛官の技能教育の為の学校である。ここではミサイルや大砲、通信、レーダー等について学ぶ。
「それでどうなりました！？」
本郷が思わず身を乗り出した。
「結局真相はわかりませんでした」
大熊三佐はあえて素っ気無い口調で言った。
「そうですか・・・・・・」
本郷は拍子抜けした。どうやらこれが見たかったらしい。これは彼の計算のうちだった。
「しかし一つ面白い事がありましてね」
ニヤリ、としている。
「それは何ですか？」
拍子抜けしている本郷に替わって役が尋ねた。
「その自習室で机や椅子が急に動き出したらしいのです」
「！？ポルターガイスト現象ですか？」
本郷も顔を上げた。拍子抜けしていた顔が急に生き生きとしだした。
「そうです。それで危なくなって部屋を出たらしいですが」
「そうなのですか。どっちにしろ不思議な話ですね」
「この砲台よりもそのポルターガイストの方がよっぽど気になりますけどね」
二人はそちらの方にも考えを巡らせた。
「ははは、まあこういった話はここにはいくらでもありますよ、本当に。これはそのうちのほんの一つに過ぎません」

「はあ」
二人は陸奥の砲台を見上げた。
「ですが今度の吸血鬼は怪談では済みませんなあ」
大熊三佐はここで表情を暗くした。
「候補生がもう何人も死んでいるのです。これはもうお話では済まされません。一刻も早い解決を望みますぞ」
「はい」
これには二人も表情を決した。
大熊三佐が去った後二人は陸奥の砲台を後にした。そしてグラウンドの向こうにある建物を左に見ながら小道を歩いていた。
「ここが少年術科学校ですね」
本郷が役に尋ねた。
「うん。中学校を出てすぐに入隊した自衛隊のホープ達のいる所だ」
役はその建物を見上げながら言った。
「ホープ、ですか」
「ああ。その訓練は候補生達より凄いというな。話は色々と聞いている」
「そんなに」
「まあここから防衛大学に行く者もいるし若くして下士官、やがては幹部になっていくからな。相当鍛えられている筈だ。その証拠に彼等の着ている制服は七つボタンだ」
かって予科練が着ていた服である。
「七つボタンですか」
本郷もその服を知っていた。
「そうだ。それだけでも彼等がどれだけ期待されているか解かるだろう」
「ええ」
この七つボタンの制服を着ているのは彼らの他にはパイロット候補生の航空学生、幹部要員である曹候補学生等である。いずれも幹部自衛官になる事を期待されている人達である。

二人は道を歩いていく。そして何かを探し回っている。
「やはりここにもいませんね」
「ああ。やはり何処かに消え去ったか」
探しているのはあの花である。だが何処にも無い。
「しかし何処かにいる筈だ。奴はこの学校からは出られないのだからな」
「ええ。あの赤煉瓦と関係があるからには」
二人は赤煉瓦の方を見た。
「それにしてのあの赤煉瓦ですけれど」
本郷が歩きながら役に尋ねた。
「確か全部イギリス製でしたよね」
「そう。イギリスで造られて船で運ばれたんだ」
「そう思うとかなり手間が掛かっていますね」
「そうだね。費用も掛かっている筈だ。あの建物は一朝一夕で出来たものじゃない」
「それも歴史ですか。イギリスというのはやはりロイヤル＝ネービーを意識してですか」
「うん。戦前の帝国海軍はロイヤル＝ネービーを範としていたからね」
「まあ当時のイギリスといえば押しも押されぬ超大国ですからね」
「そう。七つの海を支配する大帝国だったね」
「ロンドンでは随分えらいめに逢いましたけれどね」
「あれは君が悪い。ロンドン塔で白昼に刀を出せば大騒ぎになるに決まっている」
「けれど皆映画撮影だとばかり思ってましたよ」
ちなみに二人はかってイギリスで仕事をしたこともある。塔に出る謎の白い影との戦いである。
「その割には向こうのお巡りさんが団体で血相変えて来てくれたな」
「あれにはびっくりしました。我が国のお巡りさんに匹敵しますね」
「おかげで我々はロンドン市警と京都府警のブラックリストに載っ

ているそうだ」
「残念です。もう少し捜査に理解を示して欲しいです」
「理解して欲しかったら婦警さんに手当たり次第に声をかけるのを止めるんだね」
「あれはごく自然な行為ですよ、ごく自然な」
「ここの隊付の人がぼやいてたぞ。あちこちの女の子に声をかけまくってるって。苦笑していたぞ」
「おかしいなあ。ちゃんと仕事はしているのに」
「それと一緒にやるからだろ。嫌でも目につく。自衛官の人達が親切にしてくれるからといって頭に乗らないように」
「わかりましたよ」
実はほとんど判っていない。
「で、話は戻る。赤煉瓦とあの吸血鬼の関係だが」
「あ、はい、それですよね」
その言葉に本郷も頷いた。
「どう見てもあれは我が国の妖怪や魔人ではないな」
「・・・ですね」
二人の顔が真剣なものになる。
「我が国の吸血鬼は飛頭蛮や鬼位だ。花の化身が血を吸うなど聞いた事も無い」
これは本郷も考えていた事だ。

第十四章

「花の変化にしてもおかしい。あんな赤い花の化身は私の記憶には無いよ」
「俺も初めて見ましたね。花の精とかなら普通可愛らしい女の子か着飾った美女ですからね」
「あと樹木子かな」
「あまり違和感はありませんがここに生えるにはちょっと不自然ですね」
「ああ」
樹木子とは戦場の跡に生える妖木である。外見は普通の木と変わらないが戦場に流れた血を吸って生きている為血を好む。常にそれに飢えており側に人が通ると木の枝をまるで触手の様に動かしその生き血を吸って殺すのである。
「最初は樹木子か何かとも思いましたけれどね。それにしては行動範囲が広いですし」
「そう。あれは近寄る人にしか襲い掛かれない。あの女怪は自分で動けるからな。それに」
「それに・・・・・・？」
「あの姿はどう見ても日本人のものではない」
「ああ、成程」
それには本郷も納得した。体型といい髪の性質といい顔の造りといい日本人よりも西洋人にそっくりだった。
「心当たりがあるとすれば・・・アルラウネか」
処刑場に流れた血を吸って咲く妖花である。外見は美しい女性である。だがその姿に見惚れた者は三日以内に死ぬと言われている。
「アルラウネですか。確かに近いかも知れませんね」
本郷もその言葉に頷いた。
「しかしあの花も人の血を吸う性質ではなかった筈だしな。血を養

分とするだけで見惚れた者が死ぬのも処刑場だからすぐに死ぬのは当たり前だしな」
「ですね。その性質はそんなに悪い妖怪じゃなかった筈ですよ。確かバンシーと似たようなものだったかと」
バンシーはアイルランドに伝わる妖精である。美しい少女の姿をしており人が死ぬ前兆に姿を現わし泣くのである。
「そうだな。だがあの女怪には明確な悪意が感じられた」
「ええ。あれだけの悪意を出している奴は化け物でもそうそういませんよ」
「うん。おそらくアルラウネではない」
「ですね。だとすれば一体何なのか」
「調べてみるか。実は赤煉瓦の事に詳しい人が他にいてね」
「誰ですか？」
「今からその人のところへ行こうと思っているんだが。どうだい？」
「誰か解かりませんけど・・・。手懸かりになるのなら」
本郷は少し首を傾げながらそれに従った。
「ようこそ」
二人はアメリカ海軍から出向してきた人の前に来ていた。マクガレイ大尉という。金髪の大柄な人である。意外と言えば失礼だが日本語がかなり上手い。
「この人だったんですね」
「うん。何でもこの学校についての資料をかなり持っておられるらしい。それこそ兵学校の時代のものからな」
「そうだったんですか・・・」
これは迂闊だった。この人からも話は聞いていたがその様なものを持っているとは思わなかったからだ。
「英語のものが殆どですがよろしいですか？」
大尉は微笑んで言った。
「ええ。どうか読ませて下さい」
本郷は喜んで答えた。彼は英語が堪能なのである。

「はい。それでは私の官舎にどうぞ」
学校の敷地内に置かれているマクガレイ大尉の官舎に案内される。そしてそこで何冊もの本を手渡された。
「どれも分厚くてとても読みがいがありますよ」
大尉はそう言うと悪戯っぽく笑った。実際にずしっとくる重さだった。
「有り難うございます。それでは喜んで」
本郷は礼を言って部屋に戻った。そして二人でその書を読みはじめた。
「こうして読んでみても本当に色々と歴史のある場所ですね」
本郷が英文の本を苦労して読みながら言った。彼は役程英語が堪能なわけではない。
「うん。まあ僕はこれだけはあると思っていたけれどね。ところで一つ面白い事がわかったよ」
「？何ですか？」
「うん、これだよ」
役は本郷にその辞典の様な厚い本の一ページを見せた。
「ここを読んでみて」
そこにはイギリスで兵学校建設に使われた赤煉瓦を実際に作った職人達について書かれていた。
「へえ、こんなものまで調べられているんですか」
これには本郷も驚いた。
「正直僕も驚いているよ。そこに興味深い人がいるよ」
「興味深い人、ねえ」
本郷はそこに目を通した。すると一人海軍と実に因縁深い関係を持つ者がいたのである。
その人は名のある煉瓦職人だった。王宮の関係者にもその名を知られ王室の宮殿や別邸の建設にも関わる程の人物であった。彼は平民でありながらその腕で多くの人から尊敬されていた。
だが彼の生活は質素であった。報酬というものにさ程興味を持た

なかった。最低限の生活さえ出来れば満足であった。彼の願いはただ一つ、良い煉瓦を造る事だけであった。

彼は結婚してすぐに妻を失った。妻との間には娘が一人いるだけであった。長く豊かな金髪を持つ美しい娘だったという。

第十五章

娘は成長してとある貴族の家の使用人になった。代々海軍の提督を輩出している名門であった。

その子息の一人に見初められたのである。だがその子息は既に結婚していた。愛人として彼女を欲したのである。こういった話は当時よくあった。ローマの慣習に習った当時のイギリスの貴族のしきたりでは貴族が使用人の少女を愛人や恋人にしても問題は無かったのである。

これに対し彼女は反抗した。そして言い寄られた時に窓から飛び降りて命を絶ったのである。

彼女の亡骸は父親の下に送り届けられた。真相は解かっていたが誰も口にしなかった。ロイヤル＝ネービーの名家に対しては誰も言えなかったのだ。それに当時の慣習で彼等に落ち度があったわけではなかったのだから。

娘を失った父親の悲しみは深かった。彼はそれを忘れようとするかのように仕事に打ち込んだ。これまでより遥かに打ち込んだ。頬はこけ幽鬼の様な外見になった。ろくに食事も摂らず骨と皮ばかりになった。それでも彼は火の側から離れようとはしなかった。

そして彼のところにある仕事の依頼が来た。日本の海軍兵学校の建物に使う煉瓦を造る仕事である。

その話を聞いて一瞬彼の動きは止まった。だが彼はその仕事を快諾した。気の乗らない仕事は引き受けない気難しい性質の男であったが何故かその仕事は請けた。そしてその仕事に一心不乱に打ち込んだ。それこそ脇目も振らずに火の側に留まった。

そして煉瓦は完成した。そして船で日本に運ばれた。そしてあの赤煉瓦が完成したのである。

「あの赤煉瓦にはこんな話が隠されていたのですか」

本郷はその話を読み終えて言った。

「うん。私も今まで知らなかったがな」
役が答えた。
「それにしても当時では当たり前の話だったとはいえこの貴族の馬鹿息子には腹が立ちますね。こいつ名のある家の奴らしいですけれど誰なんですか？」
「その本の後ろの方に載っているよ。A提督さ」
「A提督！？第一次世界大戦の時に有名だった」
「うん。ジェットランド沖会戦で戦死した人だったね」
「あの人だったんですか。これは意外だったなあ」
「まあよくある話だけれどね。僕もこれには気付かなかったよ」
名提督として知られた人である。将としてだけでなく人としても優れていた人物だったという。
「人格者ってイメージがあったんですけどね。まあ女好きは誰でもそうですけれど」
「君みたいにね」
「・・・・・・放っといて下さい」
これには本郷も黙った。
「けれどこれとあの女怪が何か関係あるんですか？この煉瓦職人の親父の怨念がこもっていて親父が出て来るというんなら話はわかりますけれど」
「出て来るのはその職人だけとは限らないよ」
「あ・・・・・・・・・・」
その言葉に本郷はハッとした。そう、人の心は他の人の中に入り生きる事があるのだ。
「大体解かったろう。あの女怪の正体が」
役は微笑んで言った。
「ええ、とても。道理で日本の妖怪には見えない筈ですよ」
本郷もその言葉に頷いて言った。
「さて、相手の正体が解かったらおのずと戦い方も決まってくる。今夜にでもやるぞ」

「ええ。向こうも出て来るでしょうしね」
二人は笑った。そしてマクガレイ大尉に本を全て返すと戦いの準備を始めた。
刀や短刀の刃を磨く。そしてそこに梵字を書く。
拳銃に銀の弾丸を装填しポケットにストックを入れる。そして懐には札を忍ばせる。二人の用意は整った。後は夜になるのを待つだけであった。
「消灯」
放送が入った。だがまだ多くの候補生達は自習を続けている。候補生学校は夜も忙しいのである。
その中本郷と役は隊舎から出た。そしてある場所へと向かう。
「お二人共、お菓子でもどうですか」
紫のジャージを着た伊藤二尉が部屋に入って来た。だが二人はもういなかった。
「そうか、捜査中か」
伊藤二尉はそう思いテーブルの上にその菓子を置いて部屋を去った。広島名物紅葉饅頭である。
黄金色の柔らかい光を発する満月の下二人は進んでいた。息は白く空の中に吐き出される。だが寒くはなかった。その気が全身を包んでいた。
気が張り詰める。それは四方八方に張られ辺りを支配していた。
教育参考館の前に来た。厳しいギリシア風の建物である。
ここには旧海軍からの歴史的資料が多くある。東郷平八郎や広瀬大佐、秋山真之等日露戦争において国難を救った誇り高き軍人達や山本五十六等二次大戦の提督やパイロット達の資料が多く集められている。意外な事に明治の文豪森鴎外の筆もある。彼は軍医としての地位も高かったのである。本名である森林太郎の名で収められている。
その中でも特攻隊の資料は心を打つ。その若い命をもって国を救わんと出撃し、そして散華していった若き侍達。彼等の純粋で哀し

い志もここに伝えられている。その激しく、純粋な心を見て涙を落とす人は多い。
その多くの資料が収められている建物の前で二人は立っていた。口から吐き出された白い息が夜の冷たい空気の中に消えていく。
二人は遠くを見ていた。闇夜の中の、遥か彼方を。
遠くから影が来た。白い、妖気を漂わせた影だった。
影はあの女怪だった。二人のところへ空を漂うように動くことなくすうっと近付いて来る。
「暫くぶりね。元気そうで何よりだわ」
女怪は二人を見て言った。
「それはどうも」
役は女怪に対して言葉を返した。
「やけに嬉しそうだな」
「それはもう。法力の強い者の血はそれだけ美味しくて力になるのですもの」
笑った。妖艶であるが血の臭いのする笑みだった。
「ほお、そりゃあどうも。俺達はあんたの食事ってわけかい」
「ええ。とても美味しい御馳走よ」
女怪はクスクスと笑って言った。
「御馳走ねえ。女の子を食べた事はあっても食べられた事はないんだが」
背中から刀を抜きながら言った。
「あら、そうだったの。じゃあこれが初めてね」
目を細めて笑った。
「もっとも最後でもあるけれど」
その細めた目が光った。不気味な赤い光を放つ。
「それはどうもお嬢さん」
役が口を開いた。そしてゆっくりと次の言葉を出した。
「いや、メアリー＝スコットと呼んだほうがいいか」
その名を出された女怪は整った眉をピクリ、と動かした。

「・・・・・・そう、知ったのね、その名を」
女怪はその顔から笑みを消して言った。
「ええ。ちょっと調べているうちにね。貴女の人間だった頃の名前だ」
役は一歩前に出て言った。
「父はウィリアム＝スコット。名のある煉瓦職人だった。君はそのたった一人の娘だった。これだけ言えばわかるね」
「・・・・・・ええ、そうよ。私は死んでから父の心に潜り込んでいたのよ」
女怪、いやメアリーは二人を見据えつつ言った。
「そしてお父さんの怨念が込められたあの赤煉瓦に私の心は入っていった。お父さんの心と半ば融合していたからね。そして私はここに来た。赤煉瓦の中で怨みを抱いたままね」
「そして兵学校と共に気の遠くなる程過ごしていたのか。恐ろしい執念だな」
「そうよ。そしてその怨みが花を咲かせたのよ。ほら、この花」
右手の平を肩の高さで上に向けた。するとあの赤い花が浮かび出てきた。

第十六章

「この花は私自身。この花が咲くようになって私は初めて動けるようになったの。そして・・・・・・」
「人の血の味も知ったってことか」
本郷が言った。
「そう。怨みは血そのもの。血が欲しくてたまらなかったわ。渇いて、乾いてしょうがなかった。だからここの生徒の血を頂いたのよ。とても美味しかったわ」
メアリーはその血の色をした唇を歪めて笑った。
「そしてそれにより渇きを癒した」
役が問う様に言った。
「そう。血を吸ったら身体に力がみなぎったわ。今まであの煉瓦の中に潜み飢えと渇きに悩まされていたのにそれが嘘のように満ち足りたわ。そしてこの美しい身体も元に戻ったし」
メアリーは二人にその白い身体を見せつけるようにして言った。
「血、血さえあれば私は飢えや渇きに悩まされず美しさを保っていられるの。どう、素晴らしいでしょ。永遠にこの美を保っていられるのよ」
二人に問いかける様な声で言う。
「そしてそれにより多くの罪の無い人達が死んでもいいのか」
役が言った。表情が無くまるで仮面の様な顔である。
「人？人がどうしたっていうの」
メアリーはせせら笑うように言った。
「人なんて私にとっては食べ物でしかないわ。だってそうでしょう？私はもう人じゃないもの」
その笑みはまさに異形の者の笑みであった。
「私は人でなくなったの。それなのにどうして人の命を考えなくてはいけないの？」

逆に二人に問い掛ける様に言う。
「私はほとんど殺されたようなものだったわ。あの貴族の将校様に。人にね。それがどうして人の事を考えなくてはならないの？」
「・・・・・・・・・・」
二人は黙っている。一言も発しない。
だがその目はメアリーから離れない。口を横一文字に結び彼女を見ている。
「そしてずっとこの煉瓦の中で飢えと渇きに苦しめられてきたわ。その苦しみが貴方達にわかるかしら。わからないでしょうね。人には」
まだ言葉を続ける。
「そしてやっと花に変化する事が出来て煉瓦の中から出て人の血を吸う事が出来たの。そして飢えも渇きも癒えこの美しい身体も戻ったわ。人の血でね」
口を三日月の様な形にした。その間から緑の歯が見える。犬歯は牙の様になっていた。
「もう飢える必要もないわ。これからは人の血を吸って永遠に生き続けるのよ。そして夜の世界を何時までも楽しんでいくの」
「・・・・・・言う事はそれだけか？」
本郷が口を開いた。
「何？」
メアリーはその言葉に整った眉を少しだけピクリ、と動かした。
「言いたい事は終わったかと言ったんだ、化け物」
「化け物？この美しい私が」
その目に不快の色を映し出す。
「そうだ、貴様は醜い化け物だ。恨みだけでこの世に残りそしてそれが肥大化した化け物だ。その赤い花は貴様のその醜い飢えた心そのものだ」
「醜いですって！？私とこの花が」
眉を歪めて問うた。

「ああ、醜いな。何故なら貴様の心が醜いからだ」
本郷は吐き捨てる様に言った。
「今の貴様はどう理由をつけようが恨みで変化した血に飢えた化け物だ。恨みを血への欲望の為に理論武装して都合良く言っているだけだ。そんな貴様が美しい筈が無いだろう」
「・・・・・・口上を言うの？」
「口上と思うならそれでもいい。だがな、血に飢えた化け物が美しいとは誰も思わないだろうな」
「そうだな、本郷君の言う通りだ」
役が口を開いた。
「貴様は最早人ではない。人に害なす魔物だ。その魔物を討ち滅ぼすのが我等の仕事。貴様に殺され血を吸われた人達の無念、今ここで晴らす」
そう言って懐から拳銃を取り出した。
「出来るかしら？人に」
メアリーは笑った。宙に浮いた。そしてその高さから二人を見下ろした。
「そうして人を馬鹿に出来るのならやっていろ。死ぬまでな」
本郷はそう言って背中から刀を抜いた。
「じきにそれも終わる」
役が拳銃を構えた。
「そうね。それは本当ね」
メアリーは二人を見下ろして笑いながら言った。
「貴方達はここで死ぬんですものね」
そう言うや否や両手から蔦を伸ばしてきた。
二人はそれを左右に跳んでかわす。そして二人は反撃を開始した。
本郷は懐から短刀を取り出した。そしてそれをメアリーへ向けて投げる。
役は拳銃を発砲した。サイレンサーを取り付けてあるので音は漏れない。

メアリーはそれに対し姿を消した。花びらがその場に散る。
「ムッ！？」
二人は辺りを見回す。気配はする。すぐにでも襲い掛かって来る。
「ここよ」
本郷の後ろから声がした。背中へ蔦を刺そうとする。
だが本郷はそれより速く右へ動いた。武道の動きの一つ、摺り足だ。

第十七章

その足で横に滑り左手に持つ刀を払う。その高さはメアリーの首の位置だ。

だがメアリーはそれを髪の毛で防いだ。何と髪が生物の如く動きメアリーの首の前に出てきてそれを防いだのだ。

「何ィッ！？」

「フフフフフ」

驚く本郷に対してメアリーは妖艶に笑った。今度こそ貫こうとする。

「させん！」

だがそれに対して役が銀の弾丸を放った。メアリーは舌打ちすると蔦をその弾丸へ向けた。

銀の弾丸は退魔の効果がある。だからこそ使っているのだ。一撃で高位の魔物を倒す事も出来る。

メアリーはそれに対し蔦を途中で切った。鞭の様だった蔦は槍になり弾丸とぶつかった。

弾丸は蔦を砕いた。だがそれにより地に落ちた。

「そう来るか」

「フフフ」

表情こそ変えないがメアリーを睨みつける役。本郷はその間に間合いを開いた。

「人に私は倒せないわ。所詮百年程しか生きられないのに最早不死となった私は倒せない。それが解からないようね」

メアリーは余裕に満ちた笑みを浮かべて言った。

「その言葉は今まで飽きる程聞いているんだがな」

本郷がその言葉に対して言った。

「俺達は今まで化け物ばかり相手にしてきたんだ。そういった台詞はもうどれだけ聞いたか解からない位だ」

「そうだな。どうも異形の者達の考えは大体同じらしい」
役もそれに同意して言った。
「人に害を為す魔性の者、この刃でも受けるんだな」
本郷が短刀を投げた。
「愚かな事。何度やっても同じだというのに」
メアリーはそう言って笑うと再び姿を消した。
「そう動くのはもう計算のうちだ」
役が前へ跳んだ。そして先程まで自分がいた場所へ向けて発砲した。
「がはっ」
その銀の銃弾はメアリーの肩に命中した。
「俺達が人間だからって馬鹿にしているだろ。だからそういう事になるんだよ」
本郷は肩を押さえるメアリーに対して言った。
「そう。どうやら我々とは身体の能力が違うだけで頭の中は変わらないという事を何故理解出来ないのだろうな」
役が硝煙を漂わす銃弾を構えながら言った。
「頭の中が、同じ・・・・・・」
肩に蔦を入れ銃弾を出す。銀を受けその蔦は瘴気を出しながら溶けていくがそれを途中で切った。
「そうだ。大体元々人間なのに当たり前だろう」
「我等人間も魔界の住人もその元は同じ。ならば環境により身体の能力が変わるだけで頭脳は変わらないのが道理」
二人はメアリーを見据えて言った。
「私が、人と同じ・・・・・・・・」
その言葉を受けてかなり狼狽しているようである。
「頭の中はな。だがその心は違う」
本郷が言った。
「姿や力が違っていても心が正しければ異形の者ではない。だが心が違えば異なる」

役も言った。
「さっきも言ったが今の貴様は醜い化け物だ。貴様の心は血に飢え恨みを肥大化させた化け物だ。俺達はその化け物を俺達は討つ」
「・・・・・・黙って聞いていれば好き放題言ってくれるわね」
メアリーは宙に少し浮きながらその髪を動かした。まるで蛇の様にうねる。
「この美しい私を化け物と、醜いと言ってくれるわね」
目が光る。その赤い光が徐々に強まる。
「その言葉、あの世で後悔するのね」
そう言うと髪が総毛立った。将に天を衝く様であった。
「その血、一滴残らず吸い尽くしてあげるわ！」
叫んだ。その目が禍々しい光を放つ。緑の牙が闇を照らす。
髪が伸びた。そしてそれを振り回してきた。
「気をつけろ！髪からも血を吸えるようだ！」
役が叫んだ。本郷がそれに従い身を後ろへ跳ねさせる。
役も後ろへ跳ぶ。そして懐に手を潜り込ませた。
「花に変化しているならこれが効く筈だ」
札を投げた。それはすぐに鳥へ変化した。
「鳥！？」
メアリーがそれを見て言った。
「違うな。式神という。我が国に伝わる陰陽道の術の一つだ」
阿部清明で知られる陰陽道、その中でも最も有名な術の一つがこの式神である。術が込められた札が変化し相手に向かって行くのである。
「そして残念だがそれは鳥ではない」
役は言った。表情を変える事は無かったがその声には笑みがあった。
鳥が赤いものに包まれた。それは炎であった。
「何！？」
炎はそのまま鳥を覆っていく。そして炎の鳥になった。

炎がメアリーを直撃した。流石の女怪もこれには血相を変えた。
「火、火！」
慌てて蔦から緑の液を吹き出して消す。そして役の方を見た。
「まさか火を使うとは・・・・・・」
「驚いたか。だがこれは私の使う術のほんの一部だ」
「何っ！？」
「これを見るがいい」
そう言って右腕を振った。するとその手に何か赤いものが出て来た。
「それは・・・・・・」
それは燃え盛る赤い柱だった。いや、柱ではない。一本の巨大な剣だった。
「炎の剣、貴様もこれは知っていよう」
幼い頃父に聞かされた遠い北の国の話。
神々と巨人達の最後の戦い。その時に炎の巨人の長がその手に持つ伝説の炎の剣である。その名は。
「レーヴァティン・・・・・・」
「あそこまで大それたものではないがな。そうだ、全てを焼き尽くす炎の剣だ」
役は剣を構えながら言った。
「そしてそれを持つのは私だけではない」
見れば本郷の刀も赤くなっていた。だがそれは役のものとは違い刀身を炎が包んでいた。
「これは“気”っていうんだ。武道に伝わる奥義の一つでな」
「気・・・・・・」
メアリーはその名を呟いた。
「そうだ。自分の持つオーラを修業により高め様々な方法に使う。その一つがこれよ」
本郷は燃え盛る刀身を構えながら言った。
「これは不動明王の術でもある。邪悪なものを焼き尽くす聖なる炎

だ」
「そう、炎は邪悪なものを焼き尽くす。特に植物の化身である貴様には効果があるだろう」
役はその隣で言った。
「覚悟しろ。この炎で貴様を焼き尽くしてやる」
二人は剣を振り被った。そしてメアリーへ向けて脚を進めた。
本郷のそれは武道の摺り足である。そして役は西洋の剣技のそれである。
「言ってくれるわね」
メアリーは言葉に怒気を含めた。そして髪を逆立たせた。
髪を伸ばし二人へ向けて飛ばした。それは細い槍となり二人を襲う。
だが狙いが定まっていなかった。心の何処かに焦り、そして恐怖が見られた。

第十八章

「甘いっ！」
二人はそれぞれ左右に跳んだ。そして同時に肩口から斬り掛かる。
メアリーはそれを瞬間移動でかわした。本来ならば二人のうちの何れかのすぐ後ろに現われただろう。
だが彼女はそこには現われなかった。参考館の上にいた。
「そこか」
炎の剣は到底届かない。だが二人には余裕が見られた。
「ここならっ」
メアリーは今度は狙いをしかと定め髪の槍を放った。それは的確に二人を狙っていた。
だがそれも二人にはかわされた。
「もうそれは見切った」
「そんなくだらねえ事してないで降りて来いよ」
二人は悠然と彼女のほうを見上げた。それを見た彼女の顔が口惜しさで歪んだ。
「ちっ」
役は式神を放つ。炎の鳥がメアリーに迫る。
彼女はそれを身を捻ってかわした。こちらもその程度の攻撃、と甘く見ていた。
だがそれが失敗だった。式神は自らの意志も持っていたのだ。
火の鳥は弧を描いた。そしてメアリーの背を狙った。
「がはっ」
背に炎の直撃を受けた。メアリーはそれに耐えられず下に落ちた。
「ぐうう・・・・・・」
それでも立ち上がる。火は髪で消したがかなりのダメージだった。
「迂闊だったな。式神は自らの意志も持っている」

役は苦悶の表情を浮かべながら立ち上がるメアリーを見つつ言った。
「もっともそれにあえて気付かせないようにしたのだがな。どうだ、中々の威力だろう」
「ぬ、ぬかったわ・・・・・・・・」
メアリーはその整った顔を歪ませた。役を睨みつけるその顔はまるで夜叉の様であった。
「しかしこの程度で私を倒せるとは思わないことね。夜はまだまだ長いわよ」
そう言うと両手を胸の前で交差させた。そして爪を全て伸ばしてきた。
「行けっ」
爪を二人へ向けて突き出した。まるで機関銃の様に二人に襲い掛かる。
「ムッ」
二人はそれをかわした。爪は隊舎やアスファルトに突き刺さった。
「そういった使い方もあるのか」
本郷はアスファルトに突き刺さった緑の爪を見て呟いた。
「どうかしら、中々の威力でしょう」
メアリーは満足げに微笑んで言った。
「確かにな。だがそれならばこちらにも考えがある」
役の目が光った。
「行くぞ本郷君、場所を変える」
「はい、役さん」
本郷は役の言葉に従った。二人はじりじりと退いていく。
「フフフ、何処に場所を移そうとしても無駄な事」
メアリーは爪を飛ばしつつ二人を追った。剣や刀に帯びられた炎を警戒して瞬間移動による攻撃は行なわない。
二人が選んだ場所は短艇庫の前だった。二人は松林に隠れるとうにしてメアリーを待っていた。

「あら、ここは」
その場所を見てメアリーは笑った。
「そうだったな。俺はここで貴様に手厚い歓待を受けたんだったな」
本郷が言った。彼が海中を捜査している時メアリーが上から攻撃を仕掛けて来たのだ。
「そうよ。よく憶えていてくれたわね」
「忘れるか、だがあの時とは状況が違うぜ」
「フフフ、それはどうかしら」
本郷の言葉をメアリーは嘲笑した。
「この爪の餌食になるのには変わりはないわ。海の中が上に変わっただけ」
「それは最後に言うんだな」
本郷は短刀を投げた。メアリーがそれを蔦で弾き返す。それが戦闘再開の合図だった。
夜の松葉林の下での闘いが始まった。紫の空には黄金色の月がある。その下で激しい死闘が行われているのだった。
「そこねっ」
メアリーの蔦が伸びる。松の木の陰に隠れる本郷を襲う。
本郷は木の陰にいた。メアリーの蔦を避ける為である。
だが蔦は曲がって本郷に襲い掛かってきた。まるで蛇のように。
「何っ！」
本郷はそれを慌ててかわした。蔦は松の木に突き刺さった。
「危ないところだった。まさか曲がるなんてな」
「私の蔦を甘く見ないことね。この蔦は私の意のままに動くのよ」
メアリーは蔦を爪に戻しながら本郷に言った。
「そしてこんな事も出来るわ」
そのすぐ側の松の陰で隙を窺う役を見た。するとその足下から何かが飛び出た。
「ムッ」
役は横に飛び退きそれをかわした。それは棘だった。

「何と・・・・・・」
本郷はそれを見て目を丸くさせた。あまりにも意外な攻撃だった。
「隠れる場所が多ければそれだけ有利に立てると思ったのでしょう。けどそれが裏目に出たわね。花に変化出来る私が木々の中での戦いに弱い筈はないでしょう」
メアリーはそう言って笑った。
「さあ、そろそろいいかしら。ここで貴方達を葬ってあげるわ」
両手を胸のところで交差させた。そして爪が徐々に伸びていく。
その時だった。不意に二人の姿が消えた。
「えっ！？」
メアリーは辺りを見回した。だが彼等の姿は何処にも見えなかった。
「なっ、逃げたか！？」
必死に辺りを探る。だが何処にも気配はしない。
「一体何処に・・・・・・！？」
焦りを覚える。相手には炎もあるのだ。つい先程まで優位に立っていたとはいえ安心は出来ない。
何かが落ちる音がした。後ろだ。振り向き様に蔦を飛ばす。
だがそれは松の枝だった。バサリ、と音を立てて落ちる。
「何っ！？」
枝に目がいった。そこに一瞬だが隙が出来た。
何かが動いた。しかし気配は感じない。
「短刀、それとも拳銃！？」
咄嗟に髪で払った。だがそれは髪を突き抜けた。
「なっ！」
腹に何かが突き刺さった。それは急に浮かび上がってくる。本郷の刀だった。
「馬鹿な、何故・・・・・・」
そう呟いた時腹にもう一本突き刺さった。それは役の炎の剣だった。

「ガハァッ・・・・・・」
メアリーは叫び声をあげた。口から緑の液を吐き出す。
「どうやらそれが貴様にとって血と呼べるものらしいな」
刀を持つ手から次第に実体化してきた。本郷が現われた。
「その量から見ると致命傷だな。これで勝負ありか」
役もすがたを現わした。二人共浮かび上がってくるとうに現われた。
「ま、まさか姿を消せる術を知っていたとは・・・・・」
刀が抜かれる。傷口から溢れ出てくる血を手で止めながら呻くように言った。
「違うな。俺達は姿を消してはいない」
本郷は間合いを離して言った。刀の血を紙で拭いている。
「そう、私達は姿を消す術はまだ覚えてはいない」
役が炎の剣を消して言った。

第十九章

「だとしたらどうやって・・・・・・」
メアリーは口から緑の液を流しながら問うた。
「この松の木の木と同化したのさ」
本郷は言った。
「松の木と！？」
メアリーはそれがどういう意味か理解できなかった。
「木にもそれぞれ気がある。それぞれにな。私達は自らの気をこの松の木達と同じにしたのだ」
役はメアリーに問い聞かすように言った。
「馬鹿な、つまり木の心と同じ心にしたというのか」
「まあそういう事になるな。言い方を変えると」
本郷は素っ気無く答えた。
「忍者とかがよくやるんだよな。周りと一体化するってやつ。完全にやれば姿も見えなくなるんだ」
「そこまで達するにはかなりの修練と集中力が必要だがな。しかしこういった状況では力を発する」
役も言った。
「これは我が国に古来から伝わる気の使い方の一つ。それを知らなかったとは迂闊だったな」
「確かに・・・・・・・・」
メアリーはよろめいた。既に血が足下を緑に染め上げている。
「どうやらもう立つ事もままならんようだな。せめてもの情けだ」
役はそう言うと懐から拳銃を取り出した。
「止めを刺してやる。一撃でな」
トリガーにかかっている指に力を入れる。しかしメアリーはそれを見て笑った。
「私がそんなものに倒されるとでも？」

「何！？」
これには二人共驚いた。
「私はそんなものでは死なないは。私を殺せるのはそう・・・・・・・」
その笑みに人のものではない凄みが加わった。
「私自身よ」
彼女は口から鮮血を滴らせながらも言った。
「私は誇り高き吸血花、花は人に折られるのを良しとしないのよ」
そう言い放った彼女の脳裏に人であった時の記憶が甦る。あの貴族の若者の誘いを断り窓から身を投げて死んだあの時の記憶が。
「そんな銃弾に胸を貫かれる位なら・・・・・・」
右手の爪を伸ばした。それはまるで槍のようになった。
「私自身の手で！」
それを自身の左胸に突き立てた。彫刻の様に整ったその白い胸を緑の血が染め上げた。
「な・・・・・・・・・」
これには二人も絶句した。メアリーはその二人に顔を向けて笑った。最早死が間近に迫っている顔であった。
「お生憎様ね。私を倒せなくて。けれどこれで全てが終わったわ」
メアリーは己が血で緑に染まった口で言った。
「私は滅びるわ。そして魔界に堕ちる」
言葉を続ける。
「そしてその片隅で永遠に咲き続けるのよ。そう永遠にね」
身体が屈んでいく。もう立っている事さえつらいようだ。
「貴方達が魔界に来たら喜んで迎えてあげるわ。そしてその血を一滴残らず吸い取ってあげる」
そしてまた言葉を言った。
「その時を楽しみにしていることね。それじゃあさようなら」
そう言うとメアリーの身体は消えた。無数の赤い花びらが辺りに舞った。

「これは・・・・・・・・・・」
本郷の手の平にそのうちの一枚が舞い降りた。
「彼女の最後の一咲きだ。滅び去る間際のな」
役の手の平にも一枚舞い降りた。彼はそれを指で取った。
「今度は魔界に生まれ変わるか」
役はその花びらを見つめつつ言った。
「それも良いだろう。せめて折る者のいないあの地で永遠に咲き続けるのだ。父の想いを抱いてな」
「え・・・・・・・・・」
彼の言葉は本郷の耳にも入った。そして同時に別の言葉も。
『パパ・・・・・・・・・』
それはメアリーの言葉だった。父の造った赤煉瓦に対して言った最後の言葉だった。
「あの女・・・・・・・・・」
「死して魔物になってもその根には人のものが残っていたようだな」
一陣の風が吹いた。それが花びらを全て運び去ってしまった。
風が役のコートをたなびかせる。それはまるでマントのように見えた。
花びらは全て風が運び去ってしまった。そしてその中に消えていった。
「終わったかな、これで」
本郷が風の中に消え去っていく花びらを見送りながら呟いた。
「うん。これでこの事件は全て終わった」
役が赤煉瓦を見ながら言った。
「・・・・・・そうか、やっとか。長かったような短かったような」
本郷が肩の力が急に抜けたような感じの声で言った。
「私にしては短かったな。まあ途中からここへ来たせいもあるが」
「俺はその前から色々と調べてましたからね。二回もあいつに近寄られましたし」
懐から煙草を取り出す。そして火を点けようとする。

「おい、ここでは慎んだほうがいい」
「おっと、そうでした」
役に窘められ本郷は煙草を元へ戻した。
「まあ煙草は何時でもいいか。それにしてももうすぐ朝になりますね」
二人は海のほうを見た。そこに広がる空は次第に白くなってきていた。
海もである。その闇の中に潮騒だけ響かせていたのが徐々に白波も見せはじめている。
「もうすぐ朝か」
本郷はその空と海を見ながら呟いた。
「どうだい、煙草よりもこっちのほうが一服にいいだろう」
役は彼に微笑んで言った。
「ええ」
本郷も微笑んだ。そして海の方へ進んだ。
「確かに仕事の後の朝日は最高ですね」
「ああ。今日でこともお別れだ。じっくり見るとするか」
「そうですね」
しかしそうはいかなかった。海を見る二人のところに誰かが自転車で来た。
「あっ、お二人共そちらにいたんですか。探しましたよ」
伊藤二尉である。紫のジャージを着ている。
「探したって・・・何かあるんですか？」
二人は怪訝そうに尋ねた。
「ええ。我が校の名物行事ですよ」
伊藤二尉はそう言うとにこりと笑った。
「名物行事って・・・・・あれですね」
「ええ、あれです。役さんは確か初めてでしたね」
「ええ、まあ」
「運がいいですよ。今日見れるんですから」

役の言葉に対しても笑みで返した。本心から楽しそうである。
「丁度今総員起こし五分前です。もうちょっとしたらここへ全員駆けて来ますよ」
「そうですか。それは楽しみですね」
二人のこの言葉にはいささか社交辞令も入っている。
六時になった。起床ラッパが鳴る。
そして怒濤の様な足音が聞こえて来る。紫の作業服を着た彼等が来た。
「さあ、総短艇ですよ」
伊藤二尉が少年の様な笑みと共に言った。候補生達は必死の形相で短艇に付いていく。
短艇が次々に降りて行く。そして海へ漕ぎ出していく。
「何か凄い光景ですね」
必死の形相をする候補生達と教官。そしてそれを照らす太陽。青い海。全てが対照的であった。
「そうだね。しかしだからこそ綺麗だ」
「ええ」
二人はその光景を静かに見ていた。戦いの後の朝日がやけに眩しかった。

吸血花　完

２００３・１２・２４

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3262f/

吸血花

2010年10月8日14時59分発行